期末考査が間もなく始まる・・・

6月30日から1学期期末考査が始まる。準備はできているだろうか。日々の積み重ねがある場合は、取り立てて試験勉強に取り組まなくても対応できるかもしれないが、日程・範囲が提示されるからこそ、万全の準備を行い、最大限の結果を残せるように努力することも大切だ。

本校では、「競争より共生」ということを重視している。他者との競争で伸びる人、他者との競争で伸ばそうとする学校もあるが、本校は「過去の自分からの成長」を大切にしている。自分の周囲との信頼関係を構築し、共に励まし合いながら努力する。比べるのは、過去の自分であり、他者ではない。

地道に努力したことは必ず積み重なっていく。その積み重ねが「成長」なのだ。時にはその成長がすぐに結果に結びつかないときもある。それでもその成長の軌跡が消え去ってしまうことはない。確実に積み重なっていく。「刻まれた現象としての過去を変えることはできないが、過去の意味を変えることはできる。」とも言う。これからの行動が過去の行動の意味を変えていくということだ。言い換えると、過去の失敗はそれを糧にして工夫・努力すれば、それは失敗に終わらずに、飛躍のためのジャンプ台だったと考えられるようになるということだ。6月17日の朝日新聞別冊に、覚せい剤取締法で有罪になった元ヤクザの男性が司法試験に合格し、弁護士として活動しているという話題があった。現在、彼は犯罪者の裁判の弁護はもとより、過去の極道の経験を活かした犯罪者の社会復帰への援助を行っているということだ。

人生は一度きりだが、新たな道へのスタートは一度きりではない。また、全ての人に使命がある。

まだ何者でもない現在の自分を、これから出会うヒトモノコトによって磨き、成長させる。ダイヤモンドのあの美しい輝きはダイヤモンドでしか磨けない。易きに流れず、様々なヒトモノコトとの出会いを今よりもっと多様なものにするには、歯を食いしばってでも自分を成長させて選択肢を増やし、自分を成長させられる環境に自分の身を置くことだ。努力しない人のところには、努力しない人しか集まらない。

生き方は自分で決める。そして自分で責任をとれ。どんな自分にする？その歩みの一つが期末考査だ。

「味覚」にも遺伝子に組み込まれた本能がある

「嗅覚」が命を守るという話は前回伝えた。今回は「味覚」に触れてみる。「味覚」は「嗅覚」に支配されている。風邪をひいて鼻水が出ているとき、食べ物の味を感じないという経験がある人も多いのではないだろうか。また、小学校時代に毎日鼻をつまんで嫌いな牛乳を飲んでいて友人を思い出す。

こういう実験がある。被験者には内緒でウナギのかば焼きをイチゴフレーバーの香料でイチゴ味にし、まずは鼻をつまんで食べてもらう。そうすると被験者はそれはウナギだという認識でおいしそうに食べることができる。ところが、その途中で鼻から手を放してみると「イチゴ味のウナギ」になり、たいいていの被験者は、想定外の味に驚いて吐き出してしまう。それだけ味覚は嗅覚に影響されているという。また、食物を取り入れる口の上に鼻がついているというのは実に理にかなっており、食物を体に取り入れる前に鼻で匂いを確認し、口に入れて更に嗅覚と味覚で安全性を確認してから体内に取り込むことになる。危険なものを体内に取り込まない二重の関門が機能している。違うところに鼻があるとややこしい。

ピーマンが嫌いな子どもが多い。苦みのある食べ物には危険なものが多く、本能として苦いものを拒絶する遺伝子の作用がそうさせている。逆に甘みは、エネルギーになるものが多いので、子どもは甘いものに目がないことが多い。これも遺伝子の作用だ。ただ、年齢と共に味覚は変化し、好き嫌いも変わっていく。味覚は3ヶ月頃から10歳ころにかけて、育った環境や習慣によって発達すると言われている。

日本の食文化が海外で人気である。YouTubeには、日本を訪れた外国人に日本の食べ物を食べていただき、その反応を見る動画がアップされている。例えば、鰻、トンカツ、かつ丼、寿司、ラーメン・・・、口々に「Amazing」という言葉が出てくる。多くの外国人が日本の食文化のレベルの高さに驚かされている。甘味、塩味、苦味、酸味、うま味を味覚の五味といい、中でも海外では「うま味」に関心が高くなっており、日本の出汁(だし)文化は、フランスの三ツ星レストランのシェフが注目し始めた。うま味で塩分を控えられるともいう。味を感じるの舌などにある味蕾(みらい)、五味それぞれ舌で感じる部位が違う。苦い薬を服用するためには、舌の先の方に乗せて服用するとのがいいと言われている。苦みを感じるの舌の付け根にあり、そこに触れないように、甘みを感じやすい舌先に乗せるのだという。